



南の目指す生涯学習社会

～みんなが元気に みんなが幸せに～

令和3年度障害者の生涯学習支援モデル事業

「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」秋田大会

平成28年4月の障害者差別解消法の施行以来、障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実が一層重要となっています。このような中、県教育委員会では、平成30年度から文部科学省の委託事業を受け、障害者の学校卒業後における多様な学びを支援するために、全国に先駆けて「障害者の生涯学習支援モデル事業」を実施し、今年で4年目を迎えています。

今年度、南教育事務所管内では、「紡ぐ126号」でお知らせしたとおり、湯沢市複合施設「ばあとなあ」がこの事業を受託し、生涯学習講座や交流学习を通じて、効率的な学習プログラムや体制づくりを検討・模索してしているところです。「ばあとなあ」は、稲川支援学校と連携しながら、学校から社会へ進む移行期の在り方についての実践研究も進めています。

去る8月26日、県教育委員会はこの事業の一環として、「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」秋田大会を開催しました。このコンファレンスは、「『つながり』を生み出す私たちの取組」のテーマで、「障害者の生涯学習支援モデル事業」の取組を関係者のみならず、広く県民に知っていただくことを目的に、希望する市町村や学校、事業所等のサテライト会場をオンラインで結んで開催したものです。

コンファレンスでは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の津田英二氏が、「障害者の生涯学習を持続可能にする『つながり』の創出」のテーマで基調講演しました。津田氏は、障害者の生涯学習は、まだ草の根的に行われているものが主で都道府県や市区町村によって温度差があるが、今後はそれらが関係機関等と「つながる」ことが重要だと力説していました。

コンファレンスが開催された日は、折りしも「2020 TOKYO パラリンピック」たけなわの時期でしたが、障害者の生涯学習についても、今後広く推進されるよう期待しています。



横手市サテライト会場の様子

アドバイザーコラム：学校・家庭・地域の連携・協働 15

オンライン〇〇

社会教育アドバイザー 小笠原 重夫

コロナ禍によって、私たちの生活には様々な変化が生じましたが、私にとってその最たるものは、「オンライン〇〇」が増えたことです。

皆さんの中にも、「オンライン飲み会」などを経験された方がいらっしゃるかと思います。

メカ音痴で、しかもコミュニケーションの基本は相手と対面で話すのが一番と考えてきた私は、初めはそのような類いのものを使うことを避けてきました。

ところが、オンライン飲み会を一度経験してみると、リアル飲み会では絶対に参加できない遠方の友人と旧交を温めることができるなど、「共感的なコミュニケーション」が十分に成立するツールなのだというを実感しました。

最近では、ウェブ会議システム「Zoom」等を使わないと仕事にならないということも、とても多くなりました。

それらのシステムは、遠く離れていても、まるですぐ近くに居るように、数十人が画面付きで一度に話ができるので、率直に言ってスゴイと思います。まさに時代の進歩と言わざるを得ません。

もちろんこれらのツールには、生身の人と人との触れ合いはなく、当然メリットとデメリットがあります。

しかし、コロナ禍で大人数の事業や研修会等の開催を慎重に判断することが求められている折、市町村や学校等でも「オンライン〇〇」の開催を積極的に検討してもよいのではと思います。

そのためには、ネット環境を整え、パソコンやタブレット等による参加が必要になります。高齢の方々にはちょっとハードルが高いかもしれませんが、長らく社会教育の課題だった「若い世代を巻き込む」ことについては、「オンライン〇〇」が突破口になるのでは？と思っているのですが。